

令和4年度 学校教育自己診断 中学校（共通項目）

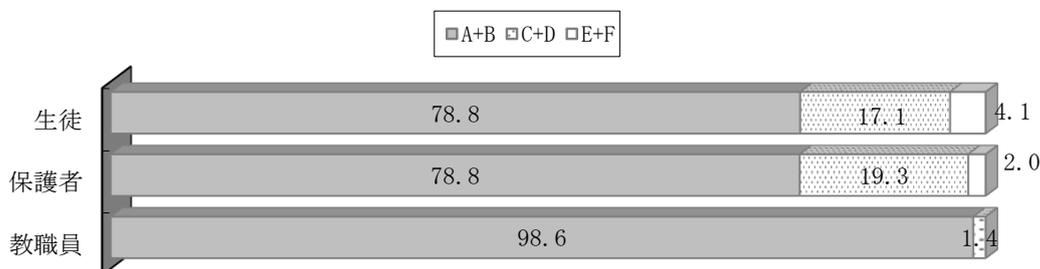
1. 学校の生活について

生徒 学校へ行くことが楽しい。

保護者 子どもは、学校へ行くことを楽しみにしている。

教職員 学校では、生徒がいきいきとした学校生活を送れるよう、学校全体で取り組んでいる。

A:よくあてはまる B:ややあてはまる C:あまりあてはまらない D:まったくあてはまらない E:わからない F:無回答



〔分析〕

前年度比:生徒-6.1%、保護者-2.7%、教職員+1.5%

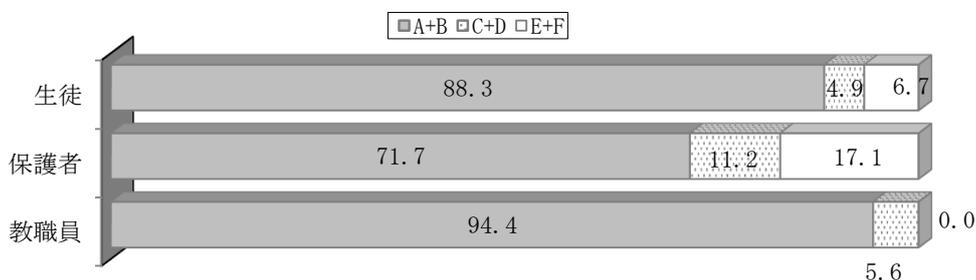
前年度との比較において、生徒・保護者の肯定的回答が減少した。要因は様々ではあるが、不登校生徒数が増加傾向にある中で、学校が全ての生徒にとって安心して楽しく通える魅力ある環境であることや、これまで以上に福祉的な役割や生徒の居場所としての機能を担う必要がある。生徒を取り巻く個別の教育的ニーズを把握し、様々な課題を乗り越え、生徒一人一人の可能性を伸ばしていくことができるよう教育活動全体で取り組んでいく。

2. 「確かな学力」の育成について

生徒 先生は、生徒が主体的に学ぶことができる授業を行っている。

保護者 学校は、生徒が主体的に学ぶことができるよう授業を工夫している。

教職員 学校では、生徒が主体的に学ぶことのできる授業づくりを推進している。



〔分析〕

前年度比:生徒+3.3%、保護者-4.2%、教職員+4.4%

前年度質問内容

生徒:先生は、学習に興味や関心を持たせる指導をしている。

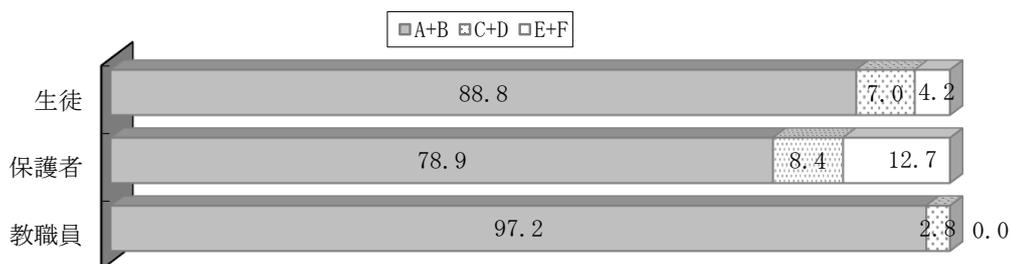
保護者:学校は、学習に興味や関心を持たせる指導をしている。

教職員:学校では、生徒が意欲的に学ぶことのできる授業づくりのために、全校的な研究が行われている。

生徒・教職員とも前年度と比較して肯定的回答が増加した。新学習指導要領で求められる「主体的・対話的で深い学び」への授業改善において、対話を取り入れた様々な工夫が定着してきたことが要因として考えられる。教職員においても、各学校の研究課題の共通認識を図ることや、全校的な授業力向上に向けた取組の充実等の成果であると考えられる。今後も、教職員一人一人が生徒の関心・意欲を高めるために、試行錯誤しながら授業改善に向けた教材研究を行うことが求められる。保護者については、否定的な意見のほか、「わからない・無回答」とする回答も一定数あるため、各学校での取組を積極的に発信していく。

3. ICTの活用について

生徒 コンピュータやプロジェクターを使った授業は、わかりやすい。
 保護者 学校は、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使ったわかりやすい授業を行っている。
 教職員 学校では、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使ったわかりやすい授業を行っている。



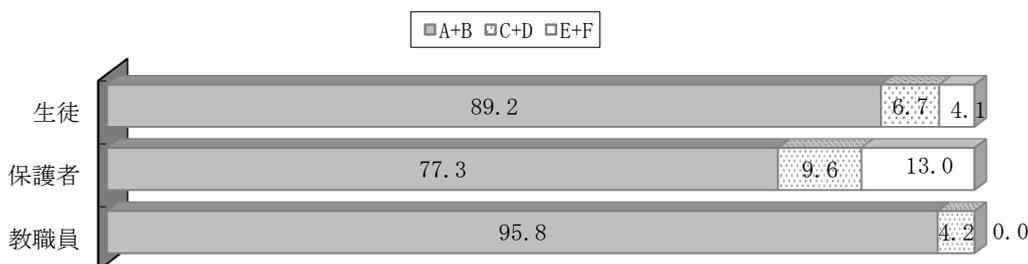
[分析]

前年度比:生徒+0.8%、保護者+3.7%、教職員+6.3%

生徒・教職員の肯定的回答が80%を超えており、高い数値となっているが、ICTの活用にあたっては、学習指導要領の趣旨を踏まえ、各教科等において育成すべき資質・能力等を把握した活用を図ること。また、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善に生かすため、1人1台の端末をどう継続して活用し、その成果を発信していくかが課題となっている。保護者に対して、授業内容や様子等を学校だよりやホームページ等を活用して周知を行う必要がある。

4. 成績・評価について

生徒 学校が出す学習の成績・評価について、納得できる。
 保護者 学校は、子どもの学力や学習状況に対する評価基準を、適切に提示している。
 教職員 学校は、生徒・保護者にわかりやすく、適切な評価基準を提示している。



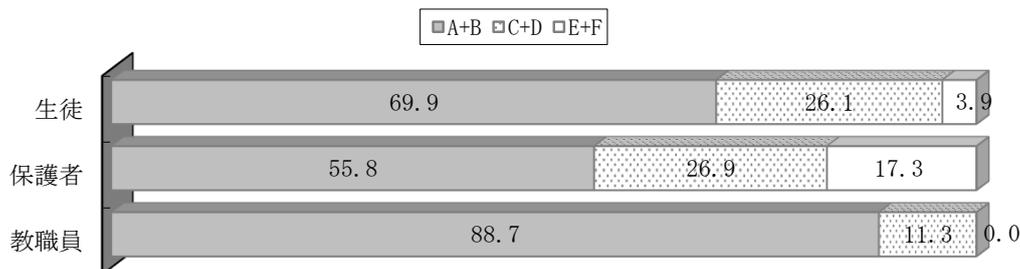
[分析]

前年度比:生徒-0.2%、保護者+2.1%、教職員+1.5%

学習に関する評価や成績は、生徒が自らの学習活動を見つめ直すきっかけとなることや、保護者の学校に対する信頼や協力を得る手掛かりとなることから、妥当性や信頼性、透明性を高めることが不可欠である。生徒においては、前年度から肯定的回答が増加しており、各校の取組の成果であると考えられる。しかし、保護者の回答には、生徒と比較すると肯定的回答が少なく、「わからない」の回答も一定数あることから、保護者に対して、学習評価が通知表の評定(5段階)だけで伝わることがないように、学級・学年懇談や二者・三者懇談の機会を十分に活用する等、保護者等に対して周知を図る方策を検討していく。

5. 自学自習について

生徒 自ら進んで学習(宿題、予習・復習、自主学習など)している。
 保護者 学校は、自学自習力の育成を推進している。
 教職員 自学自習力育成のため、学校全体で取り組んでいる。



〔分析〕

前年度比:生徒+3.9%、保護者+10.1%、教職員+5.8%

前年度質問項目

生徒:家では、自ら進んで学習(宿題、予習・復習、自主学習など)している。

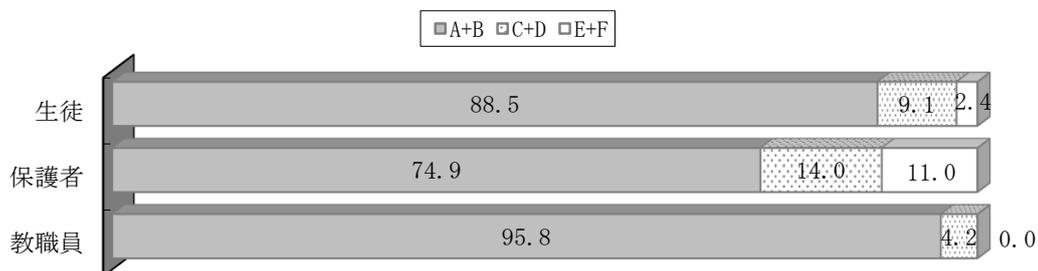
保護者:学校は、家庭学習の習慣がつくよう取組を行っている。

教職員:学校では、家庭学習の充実に向けて、家庭と連携するなど、重点的に行っている。

昨年度と比較すると、三者とも肯定的回答が増加したものの、生徒の約3割、保護者の約4割が「否定的・わからない」と回答している。ICTを活用し、自ら学習を調整するなどしながら、生徒ならではの課題の設定、生徒自身による情報収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、生徒が主体的に学習に取り組むことに重点をおいて指導してきた。今後、授業において、さらに探究的な学習を中心に展開することで「自ら学ぶ力」の育成を図っていく。

6. 読書活動の推進について

生徒 学校では、朝読書など、読書活動に積極的に取り組んでいる。
 保護者 学校では、読書活動に積極的に取り組んでいる。
 教職員 学校では、読書活動に積極的に取り組んでいる。



〔分析〕

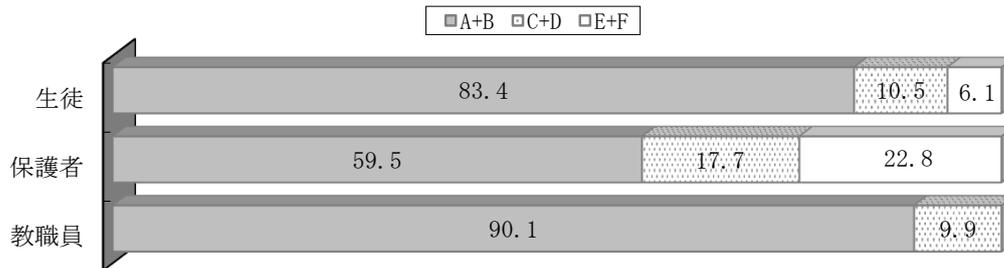
前年度比:生徒+9.4%、保護者+5.2%、教職員+1.5%

三者とも一定の数値が得られているが、特に生徒の肯定的回答が増加した。落ち着いた雰囲気の中で朝の読書活動が全校的に推進されていることや、学校図書館における室内環境や蔵書の整備等が進められてきたことへの評価が、一定数値に表れたものと考えられる。

今後は、学校図書館の環境を充実させ、読書センター・学習センター・情報センターとしての機能を高め、豊かな人間性や言語能力等の育成を図っていく。

7. キャリア教育について

生徒 授業や様々な学校での活動の中で、自分の生き方(自分らしさ、他の人や社会とのかかわり、進路など)について、考える機会がある。
 保護者 学校は、学年に応じて、それぞれの生き方(卒業後の進路を含む)について、考えられるような指導(キャリア教育)を行っている。
 教職員 学校では、生徒が自己の生き方を見つけられるよう、各学年に応じた系統的なキャリア教育を行っている。



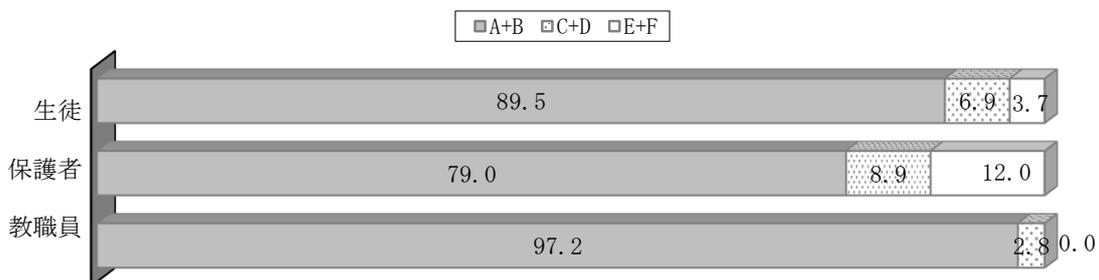
〔分析〕

前年度比:生徒-1.0%、保護者-0.1%、教職員-2.8%

前年度までと比較して、三者の肯定的な回答が微減している。職場体験の実施の有無に関わらず、生徒が、目標を持ち、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、自らの意志と責任で進路を選択決定する等、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、キャリア教育の充実を図るとともに、生徒の自己肯定感や自尊感情の醸成に重点を置き、全ての教科や教育機会を通じて「自分らしい生き方」や「他者とのかかわり」を意識させた取組みを行っている。また、キャリア教育の意義や取組内容について、保護者への周知・理解に努める。

8. 「心の教育」や規範意識の育成について

生徒 学校では、お互いの違いを認め合う人権の大切さや社会のルールについて学ぶことができる。
 保護者 学校では、お互いの違いを認め合う人権の大切さや社会のルール等について学ぶ機会を設けている。
 教職員 学校では、お互いの違いを認め合う人権の大切さや社会のルール等について指導している。



〔分析〕

前年度比:生徒-2.4%、保護者-3.4%、教職員+2.9%

前年度質問項目

生徒:学校では、人権の大切さや社会のルールについて、道徳の授業などで学ぶ機会がある。

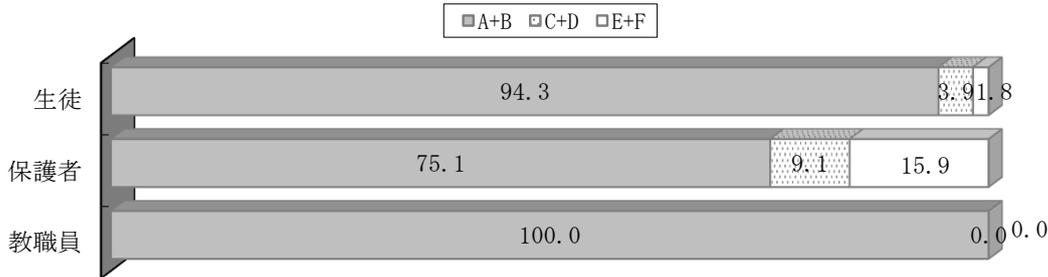
保護者:学校では、中学生として守るべきルール・マナーや人権の大切さについて、適切に指導してくれる。

教職員:学校では、生徒が人権の大切さや社会のルールを身につけることができるよう、年間計画に基づき、道徳教育を継続的に行っている。

各学校においては、道徳科を中心に、各教科の授業において、問題解決的な学習や体験的な学習等を通して、様々な場面において、多面的・多角的に考えたり、議論したりすることにより、お互いの違いを認め合ったり、大切にしたりする取組みを充実させてきた成果である。今後、学校の取組について、さらに家庭と連携していくことが必要である。

9. いじめ防止・対応について

生徒 学校は、いじめ防止の取組について学ぶことができる。
 保護者 学校は、いじめ防止・対応について学ぶ機会がある。
 教職員 学校は、いじめ防止・対応の取組を組織的に行っている。



〔分析〕

前年度比:生徒+17.5%、保護者+11.6%、教職員+2.9%

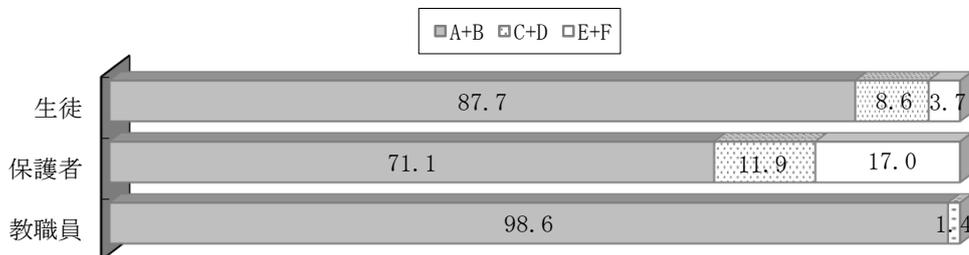
前年度質問内容

生徒:学校は、いじめ防止や早期発見の取組を進めている。
 保護者:学校は、いじめ防止や早期発見の取組を推進している。
 教職員:学校は、いじめ防止や早期発見の取組を、組織的に行っている。

前年度と比較して、生徒・保護者で肯定的回答が大幅に増加している。要因として、各中学校において生徒会本部を中心にいじめについて考える取組を行うとともに、いじめの未然防止の取組や、いじめを起こさせない日頃からの環境整備が重要であり、生徒会本部による啓発活動だけにとどまらず、生徒の望ましい成長を促す指導を行ってきた成果である。学校全体のチームとして生徒指導を行う体制の構築や共通理解を図ってきた。保護者については、「わからない・無回答」の回答が減少したものの依然として課題である。いじめ防止・対応について学校として取り組んでいることを、「いじめ対応リーフレット」等を有効に活用しながら、積極的に発信し、保護者の理解につなげていく。

10. 「食の教育」について

生徒 学校では、「食」の大切さについて、考える機会がある。(生徒)
 保護者 学校では、「食育」についての取組を推進している。(保護者)
 教職員 学校では、「食育」についての取組を組織的に行っている。(教職員)



〔分析〕

前年度比:生徒+3.9%、保護者+5.4%、教職員+2.9%

三者ともに肯定的な回答が増加したが、これは、家庭科での成分表の読解や社会科での食糧問題の考察等、教科を横断した「食」への取組や、生徒委員会主体の給食の残食について考える活動等の成果と考えられる。今後も、生徒の実態に即した指導目標を設定し、食生活や健康に関する行動の変容に資する取組になるよう努めていくとともに、保護者には「わからない・無回答」の回答も多いため、学校の取組を積極的に発信していく。

※令和2年度まで質問事項としてあった「保護者や地域との連携について」は、今年度新型コロナウイルス感染拡大防止の観点で学校行事などを中止したため、質問項目から削除しております。